

人の一生をはるかに遠くまで行く急ぐからず

大升川を間に挟んで、島田金谷夫に此の智恵は乃公等が著らして遣はすか  
鴨海ですき馴れぬ人は何んなに閑居場静かにしなさい」と大勢の人足に鞭  
役人と雲合に難題を云掛れして難儀すつ、庄八を案内して閑居場へ参つた  
が知れさせやんや、マァー宜い氣味で、人足等は土間にせし路で且那  
した」と褒めをやして居る折柄向ふのりと琛を問て下せ此琛が  
方に當つて人路喧しうあれ、彼れ御儀御用は對めねへぞ、假令領主  
と云ふ聲が盛んに起つた見れば人の御物でも手を着けねへぞ、充分に  
だが彼此れ二十三名、たの一手に被令すやうな事をするの

都市なり是れ大都會に於ては公  
自ら公園を經營する甚だ容易な  
小都會に於ては其の經費の上

▲外相・遂に辭職を申出するも皇帝は健康の回復を信じ長期賜に決定すとの

二月 會

100

もも 婆心ながら一言す  
に 於場所にて隙間多き一重壁一重柱  
に 是に到底渡きの付く筈なきを

の構造は、是れに乘つて行くことにす  
る。尾張の國は一足も通らずして、直

のなる外套をかを使用し居ゐるかを爲なす  
のたるに彼等かれらの外套をかの羅紗ろさは普通ふつう

子甚だ輕少ではあるが、藝が拙者に持合  
せの路用がござるに依て之れを各々に

縮も同様の効あるべきも入れた  
一方に寄り易きを以て裏より糸

綸は「兩御意に甘へて御恩借仕る始めて  
 十御目にかゝりし其許に、危難を救ふて

等 屋なぞは知り居るならんも知ら

洋服もの些ちつども早くはや吉田よしだの宿しゆくに取かへて返かへして身みの  
者もの安泰あんたいを計はかり給たまへ、其許そのもと一人ひとりなれば兎うさぎも

公債株式現物專門  
京城南山町三丁目  
曾野峻輔 商店  
現物  
問屋

しやせに從ひ此場を去て吉田の宿に赴  
き申すべし、御恩は誓つて忘却仕ら  
ず」と夫婦諸共庄八の義心深き感服

なければならぬ、兎も角間屋場まで  
鳴海の宿の恥になるやうに掛合は爲な

▲**葡國** 政府一般的同盟の勃興を  
陸海軍に命じて大規模の警戒を執

度<sup>び</sup>庄<sup>せう</sup>八<sup>はち</sup>を伏<sup>ふ</sup>拜<sup>し</sup>み<sup>く</sup>吉<sup>よ</sup>田<sup>した</sup>を捐<sup>さ</sup>して立<sup>た</sup>出<sup>い</sup>存<sup>ぞん</sup>合<sup>ごう</sup>

心算であつた、いや出迎へ大儀に  
る早々案内しろ、人足共無禮なせ  
が掃が明かぬ中は御領主様の荷物でも

●雜貨 店を開き雜貨野菜類を賣

立た行いんで見みて居ゐた人々口々に「へエ立た」  
同どう一いつ何なんと偉偉い方かたぢやあありませんか、思おもひ  
波なみの郵ゆう民みん家け業ぎやうは

て行て目に物見せてやるからそう  
と大地を叩いて罵り叫ぶ聲扱も  
して、御役人の御裁判を頂戴して望  
み、當所代官久永喜一郎様に御訴へ申  
上る。並にわ名前を承



1

1

生熟被成下度  
に陳列致在候間御

生熟被成下度  
に陳列致在候間御

十百個個點

十百個個點

會社

會社

幸に益々

幸に益々

之居開催

之居開催

[illegible]

雜誌	新日	胃腸	鮮朝及滿洲國公論	中央公論	實業之日本
名定	木二六〇	險世界一五〇三	陽三五〇	C C C C	八〇〇〇
價額	五三	五三	五三	五三	五三

[illegible][illegible]











